

第4回

漢感興起

かんかんこうき

「巷に生きる漢字あれこれ」

「観感興起」…目で見て心に感じ、感動して奮起すること。
(漢検四字熟語辞典より)

さまざまな立場を通して感じる、またそれぞれの角度から観ると、漢字の姿は様々ではないようです。このコーナーでは、漢字と特別な関わり合いを持つ人を取り上げ、その人ならではの「漢字模様」について伺います。

今回は、印刷物の書体を作成しているモリサワ文研株式会社のタイプフェイスデザイナー・小田秀幸さん。いつも目にする書体が作られていく様子と、そこに込められた想いを伺いました。

——明朝体、ゴシック体、教科書体…世の中には様々な書体があふれています

が、それらはどのようにデザインされ、作成されていくのか、その過程を教えてください。

まずは「どのような文字を作るか」というコンセプトを決定します。市場からの要望や流行を反映して作られる書体もあれば、デザイナーが「このような



積み上げられたデッサンの束。
一文字一文字丁寧に手描きされている。

文字を作りたい」という方針を打ち出して作られる書体もあります。

コンセプトが決まると、デッサンを行います。60ミリ四方の紙に文字を手作業で描いていきますが、ここでは、コンセプトがぶれないように一人のデザイナーで基本となる500字を全て描きあげます。一つの書体で約一万字ありますが、この500字にはその一万字のほとんどの形状が含まれているのです。

そしてその字を元にして、複数のメンバーで残りの文字を一字ずつ描き上げます。それでも一万字全てのデッサンを終えるまでに1年から2年かかります。

その後コンピューターに取り込み、デジタル化して様々な修正を加えます。実際使われる状況をイメージして文章に組んではみたり、ユニバーサルデザインの観点から読みやすいかチェックをしたりと、あらゆる角度からの確認を繰り返し、ようやく普段目にする書体となります。

——小田さんはその「基本となる500字のデッサン」を担当されているそうですが、

デッサンは、まずその字の骨格を描き、さらに紙を重ねてラフを描きます。それにさらに紙を重ね、定規などを使って肉付け、微調整しながら仕上げていきます。新たな書体を制作する際には、既存の書体はあえて参考にしないようにしています。参考になると、どうしてもだんだん似てきてしまいますから。一万字の基本となる

500字ですから、途中でコンセプトがぶれないように描き進めなければなりません。それでもぶれてくることがあるので、500字のうちでも最初に作った自分のデッサンを常に見返すようにしています。

——それにも関わらず500字で一万字の漢字を表現できるとは驚きです。

基本的には、ですけれどもね。同じ部品を持つ漢字でも、微妙に幅やバランスを変えて作成しています。その後、同じ形状を持つグループで分け、コンセプトイメージが揃っているかの確認も行っています。



「口」という部品に分けられている漢字群。
「威」「撼」「輓」は全て「感」を持つが、その幅やバランスは微妙に異なっている。

——小田さんが手がけた書体で印象深いものは？

それまで我が社にあった「リュウミン」という明朝体に対して新しい明朝体、ということで作った「黎ミン」です。最初の構想だけで12年、完成までに15年かかりました。

明朝体やゴシック体というのはその会社の顔になりますし、リュウミン同等の、いやそれ以上のものを作らないといけませんので、プレッシャーもありました。完成したときは、それは嬉しかったし、何よりホッとしていました。初めての挑戦でもありましたから、黎ミンを手がけて良かったと感激しましたね。



左から、字の骨格、ラフデッサン、清書。
紙を重ね、微調整しながら丁寧に描いていく。

永 黎ミン L	永 黎ミン Y10 EH	永 黎ミン Y30 B	永 黎ミン Y40 U
------------	-----------------	----------------	----------------

このほか、あと30書体の縦線と横線の太さがそれぞれ異なる黎ミンがある。

— 新しい明朝体「黎ミン」のコンセプトを具体的に教えてください。

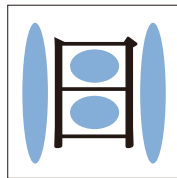
「黎ミン」は懐が広く、すっきりしていて安定感があり、素直な感じの書体です。抑揚が少なくモダンで、あらゆる場面に使いやすいよう、癖のない書体に仕上げてあります。伝統的な明朝体は、横棒の線が細すぎてゴシック体と並んだときに弱く見えることがありました。しかしそれらの明朝体のバリエーションは縦線の幅を太くしたもののしかなく、横線が太めの明朝体はありませんでした。そこで、縦線の幅のみならず横線の幅にもバリエーションを持たせたのが黎ミンです。縦線と横線の幅をさまざまに組み合わせた34もの書体、数十万字が生まれ、ギネスに認定されるまでになりました。

— そのコンセプトは書体のどのようなところに表れますか？

漢字の構成部分である「口」、もしくは「田」「曲」などの四角で囲まれた箇所を見ると、その文字の性格が分かるんです。いろんな書体がありますが、その特徴は口の形に最も表れますね。黎ミンはこの四角で囲まれた箇所が大きいので、字そのものも大きく見えます。どっしりしていて、見た目にも読みやすい、その上ですっきり感を出し…というコンセプトはこのように表れています。文字には、余白というか、特徴のある「空間」というものがそれぞれあるのです。

— 文字の「空間」？

私がこの仕事を始めた頃、先輩がデッサンしたものを塗りつぶす、墨入れという仕事ばかりを3年ほどやっていました。昔は先輩は何も教えてくれなくて、見て盗むしかありませんでした。先輩が型を取り、自分が塗りこんだ後の字をじつと見つめては、どこが良いのか悪いのか考え、自分だったらこうするのと思うこともありました。そうしてある程度形を覚えて7年ぐらいたった時に、ある日突然「空間ってこう取ればいいんだな」と気づいたのです。文字を見るとき、通常はまずその骨格を見るでしょう。そうではなく、その字を取り巻いている余白や、四角で囲まれた空間に着目するのです。もちろん骨格も大事ですが、骨格だけを見てみると文字の良さが分からないのです。逆にこの空間が分かるようになると、文字の良し悪しが見えてきます。他の文字を作るときにも、その空間をあわせることができます。空間そのものの大きさは違いますが、ほどよい均等さ、バランスの取り方が揃うんですね。



ひし形の漢字、細長い漢字など、空間の入る位置は漢字によってさまざま。

— 漢字の形もそれぞれで、特徴的な空間があるものもありますよね。

漢字は、画数が多いものより少ないもののほうが難しいです。空間やバランスをどう取るか、選択の余地が多いからです。画数が多いとマス目いっぱい詰まって自由が利かないので、逆にバランスが取りやすくなります。様々な文字の空間、太さ、大きさを揃えていくのが、難しいところですね。

— それでは最後に、小田さんのお仕事を表す漢字「文字を教えてください」。

「真」です。真心込めて「文字」一文字作っていく、という想いからです。デジタル化が進み、いま、文字は一度作ると永遠に残っていきます。ですから心を込めてきちんと作っていかないとダメだと思っています。

文字は、文化だと思っています。さまざまな情報が文字にのって歴史を動かすような場合もありますよね。そのような想いで、文字を作っています。

— 何か形を残せるって素敵ですね。

私が使う駅の近くの博物館には、石で作られた案内板が設置されているのですが、そこに刻まれている字がモリサワの字なんです。文字通り刻み込まれて残っていることは凄いいことだし、嬉しいことです。

— ありがとうございます。

インタビュー後記

文字を見て、懐かしい感じを受けたり、かわいらしいイメージを持ちたり、また手書きであれば書いた人の人となりを感じたりする。それは少なくありません。書体は、情報だけではなく何かを伝えることができるからなのでしょう。今回の取材を通して、バリエーション豊かな書体はデジタルの世界で失われかけていた「書き手の心」を蘇らせる役割を担っているように感じました。「文字」一文字に真心を込めて制作されている書体だからこそ、できることなのかもしれません。

